

新見市男女共同参画情報紙

vol.27  
2019.2

# りぼん

災害の次の日、  
大きな虹ができたよ。  
頑張ろう新見。



## 災害から学ぶ

～三助（自助・共助・公助）でつながる  
人と人、当たり前前の生活に感謝～

これまで経験したことのない豪雨に見舞われた新見市。  
今回の『りぼん』は、平成30年7月豪雨災害における、地域全体の取組やそれぞれの役割などについて、新見公立短期大学の学生たち、福本地区自主防災会、唐松自主防災会、菅生自主防災会のみなさんにお話を伺いました。



**新見公立短期大学  
幼児教育学科  
八尋ゼミの学生たち**



学生たちは、「お世話になった恩返しをしたい」、「自分のできることをしたい」、「人の役に立ちたい」など、それぞれの思いを胸に、新見市草間地域や倉敷市真備地域に赴き、ボランティア活動に携わることになりました。

「被災者の気持ちを傷つけないようにする」、「教えてくれる人の言うことを守るようにする」、「自分にはガラクタでも大切な物かもしれないので、自分の価値観で見ないようにする」など、心構えを持って、現在も被災地でボランティア活動を展開しています。そんな学生たちに話を聞きました。

**Q、ボランティア活動に携わってみて、気持ちに変化がありましたか？**

○ボランティアセンターや現地の人から、逆に元気をもらい、人と人の助け合いのすばらしさを感じた。

○今ではあまりニュースになっていないが、見えない所で苦しんでいる人がいる。現地に行かな

いとわからない。息の長い支援が必要だと思う。

○写真洗浄という作業があることを知らなかった。汚れたアルバムや写真をエタノールで拭く作業は、被災後、3ヶ月以内に行わないと写真は駄目になる。ボランティアに行って、そのことを知ることができた。できるだけ多くの写真を残してあげたい。

○被災から日数が経過すると共に、ボランティアの数が減ってくる。支援した話を家族や周りの人に話し、知らせていくことで関心が広がると思うので、これからも伝えていきたい。



八尋ゼミの学生たち  
災害ボランティアでの集合写真

**Q、将来、災害が起きたら、どのように行動できますか？**

○保育所の先生たちは、子どもたちが新しい環境に馴染めるよう、また不安にならないよう、常に子どもたちに寄り添っていた。安心できるような声かけや家族に対する配慮が必要だと感じ、自分もそんな保育者になりたい。

○避難訓練の必要性を感じる。子どもたちが不安を感じることもなく安心できるように声かけができ、連携がとれる環境を作れるようにしたい。

○ゼミの先生やみんなと出会わなかったらこの経験はできなかった。これからも、災害が起きたら、できる限り手助けしていきたい。

**福本地区区自主防災会**



意識の埋め込みが大切。今回の避難に先立って、平成29年8月に大々的な避難訓練を実施していた福本地区。この避難訓練が非常に役に立ったということです。また、

福本地区運動会では全員参加の競技種目として、防災クイズゲームを取り入れておられます。

「記憶が新しいうちに反省会をしてほしい」、「なぜ避難しなかったのか聞くことが大切だ。」という声が上ががり、避難に関する意見を集約するため、7月中には地区住民を対象に、「災害避難に関するアンケート」を実施し、反省会を開催されました。



福本地区区自主防災会 反省会の様子

**Q、アンケートから…**

○食事は、野菜の差し入れがあったり、また、婦人会の皆さんが



いろいろ考えておむすびの味噌焼やお汁を作るなど、十分だった。

○自主防災会のスタッフから、食事や敷物の用意や声かけなどをしてもらい、手伝えない自分が申し訳なかった。

○避難準備をしておらず、危機管理ができていなかった。

○事前に準備をして、早期に決められた避難場所へ行くことが大事である。

○避難のタイミングが判断しにくい。

○家族で意見がまとまらなかった。年寄りには自宅に留まり出ようとしない。素早い行動の難しさを感じた。

○安全という意識はやめて、自分の命は自分で守る行動をする。

○周りの人の声かけがあったかった。

○自主防災会の動きがはっきり見えなかった。指導者(リーダー)をわかりやすくすべきだ。

○自主防災会を手伝いたいが何をすればよいかわからない人が多かった。

○指定避難所での、駐車スペース、居住スペース及びプライバシー保護を考えてほしい。

Q、今後の活動や課題など…

○自主防災会は避難勧告で活動を開始し、避難指示で活動を中断する。(自分の安全の確保)

○避難の際には内服薬を持参することや、避難所への入退所時には受付に届け出てもらうことなど、住民の教育も必要である。

○ハザードマップを公民館に貼る。在宅や、やむを得ず指定されていない施設に自主避難した場合、食事提供や情報収集に課題が残った。

○身体が不自由な人が手すりなどの設備のない施設で生活することとは難しいので、一般避難所の他に福祉避難所も必要である。

○いざという時のシミュレーションが大切であり、避難所運営訓練(HUG)は今後も続けていく。他の自主防災組織でも是非実施してもらいたい。

○今後は、予測不能な大地震や冬の避難生活なども想定した活動も取り入れていく。

○誰が避難できていて、誰が避難できていないかを、確認することと非常に手間取ったので、緊急時名簿がすぐに準備できるように検討していく。

○地域ごとに必要な物も異なるた

め、本当に必要な物を地域ごとに分析して提供してもらう。

○各個人が災害時にどう動いていくかということ、家族で話しておくことも重要である。

Q、振り返ってみて…

解決できること、解決できないこと、ハッピーなことなど色々あったけど、電気はつくし、水も出る、建物もあって、条件が揃っていたので、笑い声が聞こえる避難所でした。また、こどもの相手をする人、お年寄りの話し相手をする人、看護師として対応する人、消防団活動をする人など、その環境の中で最大限に工夫をしようとする、みんなの姿勢に喜びを感じました。

ただ、自主防災会のメンバーも一住民です。行動に対しては自己責任となるため、活動内容には十分注意していく必要があります。

唐松自主防災会



Q、7月豪雨時の状況は？

避難を促すことが一番なので、防災会員や民生委員で各戸へ声を

かけました。「避難しよう」という声をきっかけに、避難してくれる人が多かったので、声かけによる後押しをして良かったです。しかし、時間が経過するにつれて、橋の通行禁止・道路の浸水などで、避難ができない人もいました。また、土嚢作りなどの防災活動も必要で、避難を呼びかけたくても手が回らない状況も発生しました。

避難するときに、みなさんが米や野菜を持ち寄ってくれたことがありがたかったです。また、被害に遭っていない人からの支援も助かりました。

車が浸水し動かなくなったと市外の人も避難してきました。

Q、振り返ってみて…

避難所へ避難してきた人に、思わず「避難してくれてありがとう。」とお礼を言ったことを思い出します。

避難をいつ始めるか、自己判断の難しさを痛感しました。自分の命は自分で守らないといけません。避難をするとき、特に高齢者や子どもには手をさしのべないといけません。また、地域住民以外の避難者への対応も今後は想定するべきです。

昨年、防災マップを作成して各戸に配布しましたが、どれだけの人が防災マップについて認識してくれているのか不安です。他にも、避難者カードを全戸約1,000人に配布したり、炊き出しなどの防災訓練を実施したりしています。しかし、今回の7月豪雨では、理想と違う現実を体験しました。季節ごとの防災訓練など、いろいろな面でパターンを変えて考えていく必要があります。

さらに、テレビがない中での情報収集や、避難していない人への情報伝達の方法など、防災会活動の課題がたくさん出てきました。個々の危機管理意識を高めながら、伝えていかなければいけません。



唐松自主防災会 土のう作業訓練

大雨が降り続けていたため地域の様子を確認していたら、工事関係者から「工事をしている地域が危険です。」との情報が入りました。そのため、地区の総代にすぐに連絡し、住民の避難は夕方5時半くらいから始まりました。

発電機や投光器などの防災資機材の活用、防災訓練、土嚢づくりや非常食の提供など、自主防災会と地元消防団の今までの活動が活かされました。

また、市職員の頑張りもありました。必要物資の運搬から、持病のある方や高齢者への保健師の対応など、二日間を通して粘り強く、そして避難者の方が安心できるように対応してくれました。

ペットを連れてこられた方には、ペットと一緒に過ごしてもらえるように場所を設けました。どのような状況でもプライバシーは保ちたいですが、なかなか難しかったです。

今回の災害で気付いたことは、

Q、振り返ってみて…

Q、7月豪雨時の状況は？

菅生自主防災会



地域コミュニティの大切さです。普段から地域の中で「困った時は互いに助ける」という意識を共有しています。多少危険だったかも知れませんが、大雨の中、共に避難するために集落の方を迎えに行ったり、一緒に土砂を掻き出したりますなど、お互いに助力を惜しみませんでした。そして、それがとても自然に見えました。他にも現場の状況を逐一電話で教えてくれたり、家にある食料を持ってきてくれたり、地元の商店も食料品の対応をしてくれるなど、大変助かったし、感動しました。

行政レベルでの公助には限界があります。もし、市内の1カ所が大変な状況になったら、他地域の方が進んで応援に来るような、草の根レベルの助け合いが広がって欲しいです。



菅生公民館 砂田館長(左)

編集後記

編集委員 双道昌子

八尋ゼミの学生たちが被災地で瓦礫やガラスを拾った場所に、現在、ボランティアセンターができているとのこと。

猛暑のなか、暑さと埃に泣かされながらの体験だったと想像できます。大きな物ではなく、あたり一面の小さな瓦礫やガラスを一つずつ拾っていく…。途方に暮れる作業だったと思えます。「自分たちがしたことが、どれだけ役に立ったのかわからない。」と口にした学生もいました。学生たちは頑張りました。たとえ小さな瓦礫やガラスだったとしても、それを一つ一つ取り除いた結果、そこにボランティアセンターが建ったのです。自分たちの頑張りには誇りに思っています。そして、この体験で学生たちは確実に成長しています。

若い学生たちが頑張っている姿を想像するだけで、頭が下がる思いでいっぱいになります。明るい笑顔と元気のいい声に、私たちまで元気をもらいました。卒業後、それぞれ自分の路を歩んで行くことでしょう。いつまでもその笑顔を絶やさず、元気のいい、すばらしい保育者になって欲しいと願っています。